

燃ゆる類

堀辰雄

-----  
【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）蜂<sup>はち</sup>の巣

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）彼<sup>ら</sup>一等

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと  
行数）

（例）「#「てへん+筆」、第<sup>4</sup>水準2-78-12」

-----  
私は十七になった。そして中学校から高等学校へはいったばかりの  
時分であった。

私の両親は、私が彼<sup>ら</sup>等<sup>もと</sup>の許<sup>もと</sup>であんまり神経質に育つことを恐れて、私をその寄宿舎に入れた。そういう環境の変化は、私の性格にいちじるしい影響を与えずにはおかなかった。それによって、私の少年時からの脱皮は、気味悪いまでに促されつつあった。

寄宿舎は、あたかも蜂<sup>はち</sup>の巣のように、いくつもの小さい部屋に分

れていた。そしてその一つ一つの部屋には、それぞれ十人余りの生徒等が一しよくたに生きていた。それに部屋とは云うものの、中にはただ、穴だらけの、大きな卓つくえが二つ三つ置いてあるきりだった。そしてその卓の上には誰のものともつかず、白筋のはいつた制帽とか、辞書とか、ノオトブックとか、インク壺つぼとか、煙草の袋とか、それらのものがごっちゃになって積まれてあつた。そんなものの中で、或る者は独逸語ドイツの勉強をしていたり、或る者は足のこわれかかった古椅子にあぶなっかしそうに馬乗りになって煙草ばかり吹かしていた。私は彼等の中で一番小さかつた。私は彼等から仲間はずれにされないように、苦しげに煙草をふかし、まだ髭ひげの生えていない頬ほおにこわごわ剃刀かみそりをあてたりした。

二階の寢室はへんに臭かつた。その汚よごれた下着類よごのにおいは私をむかつかせた。私が眠ると、そのにおいは私の夢の中にまで入ってきて、まだ現実では私の見知らない感覚を、その夢に与えた。私はしかし、そのにおいにもだんだん慣れて行つた。

こうして私の脱皮はすでに用意されつつあつた。そしてただ最後の一撃だけが残されていた……

或る日の昼休みに、私は一人でぶらぶらと、植物実験室の南側にある、ひっそりした花壇のなかを歩いていて、そのうちに、私はふと足を止めた。そこの一隅むらに簇むらがりながら咲いている、私の名前を知らない真白な花から、花粉まみれになって、一匹みつばちの蜜蜂の飛び立つのを見つけたのだ。そこで、その蜜蜂がその足にくつついて、花粉かたまの塊かたまりを、今度はどの花へ持っていくか、見ていてやろうと思つたのである。しかし、そいつはどの花にもなかなか止まりそうも



そこには魚住ひとりしかいなかった。彼は毛ぶかい手で、不器用そうに何かのプレパラートをつくっていた。そしてときどきツァイスの顕微鏡でそれを覗のぞいていた。それからそれを私にも覗かせた。私はそれを見るためには、身体を海老えびのように折り曲げていなければならなかった。

「見えるか？」

「ええ……」

私はそういうぎごちない姿勢を続けながら、しかしもう一方の、顕微鏡を見ていない眼でもって、そつと魚住の動作を窺うかがっていた。すこし前から私は彼の顔が異様に変化しだしたのに気づいていた。そのこの実験室の中の明るい光線のせいか、それとも彼が何時もの仮面をぬいでいるせいか、彼の頬の肉は妙にたるんでいて、その眼は真赤に充血していた。そして口許くちもとにはたえず少女のような弱弱しい微笑をちらつかせていた。私は何とはなしに、今のさつき見たばかりの一匹の蜜蜂と見知らない真白な花のことを思い出した。彼の熱い呼吸が私の頬にかかって来た……

私はついと顕微鏡から顔を上げた。

「もう、僕……」と腕時計を見ながら、私は口ごもるように云った。

「教室へ行かなくっちゃ……」

「そうか」

いつのまにか魚住は巧妙に新しい仮面をつけていた。そしていくぶん青くなっている私の顔を見下ろしながら、彼は平生の、人を馬鹿にしたような表情を浮べていた。

五月になつてから、私たちの部屋に三枝と云う私の同級生が他から転室してきた。彼は私より一つだけ年上だった。彼が上級生たちから少年視されていたことはかなり有名だった。彼は瘡<sup>や</sup>せた、静脈の透いて見えるような美しい皮膚の少年だった。まだ薔薇<sup>ば</sup>いろの頬の所有者、私は彼のそういう貧血性の美しさを羨<sup>うらや</sup>んだ。私は教室で、屢<sup>しばしば</sup>、教科書の蔭から、彼のほっそりした頸<sup>くび</sup>を偷<sup>ぬす</sup>み見ているようなことさえあつた。

夜、三枝は誰よりも先に、二階の寝室へ行つた。

寝室は毎夜、規定の就眠時間の十時にならなければ電燈がつかなかった。それなのに彼は九時頃から寝室へ行つてしまふのだった。

私はそんな闇<sup>やみ</sup>のなかで眠っている彼の寝顔を、いろんな風に夢みた。

しかし私は習慣から十二時頃にならなければ寝室へは行かなかつた。

或る夜、私は喉<sup>のど</sup>が痛かつた。私はすこし熱があるように思った。

私は三枝が寝室へ行つてから間もなく、西洋一蠟燭<sup>ろうそく</sup>を手にして階段を昇つて行つた。そして何の気なしに自分の寝室のドアを開けた。

そのなかは真暗だったが、私の手にしていた蠟燭が、突然、大きな鳥のような恰好<sup>かっこう</sup>をした異様な影を、その天井に投げた。それは格闘か何んかしているように、無気味に、揺れ動いていた。私の心臓はどきどきした。……が、それは一瞬間に過ぎなかつた。私がその天井に見出した幻影は、ただ蠟燭の光りの気まぐれな動揺のせいしかなかった。何故<sup>なぜ</sup>なら、私の蠟燭の光りがそれほど揺れなくなつた時分

には、ただ、三枝が壁ぎわの寢床に寝ているほか、その枕もとに、もうひとりの大きな男が、マントをかぶったまま、むつつりと不機嫌そうに坐っているのを見たきりであったから……

「誰だ？」とそのマントをかぶった男が私の方をふりむいた。

私は惶てて私の蠟燭を消した。それが魚住らしいのを認めたからだ。私はいつかの植物実験室の時から、彼が私を憎んでいるにちがいないと信じていた。私は黙ったまま、三枝の隣りの、自分のうす汚れた蒲団の中にもぐり込んだ。

三枝もさつきから黙っているらしかった。

私の悪い喉をしめつけるような数分間が過ぎた。その魚住らしい男はとうとう立上った。そして何も云わずに暗がりの中で荒あらしい音を立てながら、寢室を出て行った。その足音が遠のくと、私は三枝に、

「僕は喉が痛いんだ……」とすこし具合が悪そうに云った。

「熱はないの？」彼が訊いた。

「すこしあるらしいんだ」

「どれ、見せたまえ……」

そう云いながら三枝は自分の蒲団からすこし身体をのり出して、私のすきすきする顛「#「需+頁」、第3水準1-94第3垂」上に彼の冷たい手をあてがった。私は息をつめていた。それから彼は私の手頸を握った。私の脈を見るのにしては、それは少しへんてこな握り方だった。それなのに私は、自分の脈搏の急に高くなつたのを彼に気づかれはしまいかと、そればかり心配していた……

翌日、私は一日中寢床の中にもぐりながら、これからも毎晩早く寢室へ来られるため、私の喉の痛みが何時までも癒らなければい

とさえ思っていた。

数日後、夕方から私の喉がまた痛みだした。私はわざと咳をしなから、三枝のすぐ後から寢室に行った。しかし、彼の床はからっぽだった。何処へ行ってしまったのか、彼はなかなか帰って来なかった。

一時間ばかり過ぎた。私はひとりで苦しがつていた。私は自分の喉がひどく悪いように思い、ひよっとしたら自分はこの病気で死んでしまうかも知れないなぞと考えたりしていた。

彼はやっと帰って来た。私はさつきから自分の枕許に蠟燭をつけばなしにしておいた。その光りが、服をぬごうとして身もだえしている彼の姿を、天井に無気味に映した。私はいつかの晩の幻を思い浮べた。私は彼に今まで何処へ行っていたのかと訊いた。彼は眠れそうもなかったからグラウンドを一人で散歩して来たのだと答えた。それはいかにも嘘らしい云い方だった。が、私はなんにも云わずにいた。

「蠟燭はつけておくのかい？」彼が訊いた。

「どつちでもいいよ」

「じゃ、消すよ……」

そう云いながら、彼は私の枕許の蠟燭を消すために、彼の顔を私の顔に近づけてきた。私は、その長い睫毛のかげが蠟燭の光りでちらちらしている彼の頬を、じっと見あげていた。私の火のようにほてった頬には、それが神々しいくらい冷たそうに感ぜられた。

私と三枝との関係は、いつしか友情の限界を超え出したように見

えた。しかしそのように三枝が私に近づいてくるにつれ、その一方では、魚住がますます寄宿生たちに対して乱暴になり、時々グラウンドに出ては、ひとりで狂人のように円盤投げをしているのが、見かけられるようになった。

そのうちに学期試験が近づいてきた。寄宿生たちはその準備を出した。魚住がその試験を前にして、寄宿舎から姿を消してしまつたことを私たちは知つた。しかし私たちは、それについては口をつぐんでいた。

「#アステリズム、1-12-94」

夏休みになった。

私は三枝と一週間ばかりの予定で、或る半島へ旅行しようとしていた。

或るどんよりと曇つた午前、私たちはまるで両親をだまして悪戯いたづらかなんかしよつとしてしている子供らのように、いくぶん陰気になりながら、出発した。

私たちはその半島の或る駅で下り、そこから二里ばかり海岸に沿うた道を歩いた後、鋸のこぎりのような形をした山にいだかれた、或る小さな漁村に到着した。宿屋はもの悲しかった。暗くなると、何処からともなく海草の香りがしてきた。少婢こおんながランプをもつて入ってきた、私はそのうす暗いランプの光りで、寢床へ入ろうとしてシャツをぬいでいる、三枝の裸かになった脊中に、一とこほだけ脊骨が妙な具合に突起しているのを見つけた。私は何だかそれがいじつてみたくなつた。そして私はそここのところへ指をつけながら、

「これは何だい？」と訊いてみた。

「それかい……」彼は少し顔を赧らめながら云った。「それは脊椎カリエスの痕なんだ」

「ちよつといじらせない？」

そう云つて、私は彼を裸かにさせたまま、その脊骨のへんな突起を、象牙でもいじるように、何度も撫でてみた。彼は目をつぶりながら、なんだか擦つたそうにしていた。

翌日もまたどんよりと曇っていた。それでも私たちは出発した。

そして再び海岸に沿うた小石の多い道を歩きだした。いくつか小さい村を通り過ぎた。だが、正午頃、それらの村の一つに近づこうとした時分になると、今にも雨が降って来そうな暗い空合になった。それに私たちはもう歩きつかれ、互にすこし不機嫌になっていた。私たちはその村へ入ったら、いつ頃乗合馬車はその村を通るかを、尋ねてみようと思っていた。

その村へ入ろうとするところに、一つの小さな板橋がかかっていた。そしてその板橋の上には、五六人の村の娘たちが、めいめいに魚籠をさげながら、立ったままで、何かしゃべっていた。私たちが近づくのを見ると、彼女たちはしゃべるのを止めた。そして私たちの方を珍らしそうに見つめていた。私はそれらの少女たちの中から、一人の眼つきの美しい少女を選びだすと、その少女ばかりじつと見つめた。彼女は少女たちの中では一番年上りしかつた。そして彼女は私がいくら無作法に見つめても、平気で私に見られるがままになつていた。そんな場合にあらゆる若者がするであろうように、私は短い時間のうちに来るだけ自分を強くその少女に印象させようと

して、さまざまな動作を工夫した。そして私は彼女と一ことでもい  
いから何か言葉を交わしたいと思いつながら、しかしそれも出来ずに、  
彼女のそばを離れようとしていた。そのとき突然、三枝が歩みを弛  
めた。そして彼はその少女の方へずかずかと近づいて行った。私も  
思わず立ち止りながら、彼が私に先廻りしてその少女に馬車のこと  
を尋ねようとしているらしいのを認めた。

私はそういう彼の機敏な行為によってその少女の心に彼の方が私  
よりも一そう強く印象されはすまいかと気づかった。そこで私もま  
た、その少女に近づいて行きながら、彼が質問している間、彼女の  
魚籠の中をのぞいていた。

少女はすこしも羞かまずに彼に答えていた。彼女の声は、彼女の  
美しい眼つきを裏切るような、妙に咳枯れた声だった。が、その声  
がわりのしているらしい少女の声は、かえって私をふしぎに魅惑し  
た。

今度は私が質問する番だった。私はさっきからのぞき込んでいた  
魚籠を指さしながら、おずおずと、その小さな魚は何という魚かと  
尋ねた。

「ふふふ……」

少女はさも可笑しくって溜らないように笑った。それにつれて、  
他の少女たちもどつと笑った。よほど私の問い方が可笑しかったも  
のと見える。私は思わず顔を赧らめた。そのとき私は、三枝の顔に  
も、ちらりと意地悪そうな微笑の浮んだのを認めた。

私は突然、彼に一種の敵意のようなものを感じ出した。

私たちは黙りあって、その村はずれにあるという乗合馬車の発着

所へ向った。そこへ着いてからも馬車はなかなか来なかった。そのうちに雨が降ってきた。

空すいていた馬車の中でも、私たちは殆ほとんど無言だった。そして互に相手を不機嫌にさせ合っていた。夕方、やっと霧のような雨の中を、宿屋のあるという或る海岸町に着いた。その宿屋も前日のうす汚ぎたい宿屋に似ていた。同じような海草のかすかな香かおり、同じようなランプの仄ほあかりが、僅わずかに私たちの中に前夜の私たちを蘇よみがえらせた。私たちは漸おとく打解けた。私たちは私たちの不機嫌を、旅先で悪天候ばかりを気にしているせいにしようとした。そして最後に私は、明日汽車の出る町まで馬車で一直線に行つて、ひと先まず東京に帰るうではないかと云い出した。彼も仕方なさそうにそれに同意した。

その夜は疲れていたの、私たちはすぐに寝入った。……明け方近く、私はふと目をさました。三枝は私の方に脊なかを向けて眠っていた。私は寝巻の上からその脊骨の小さな突起を確認すると、昨夜のようにそれをそつと撫でてみた。私はそんなことをしながら、ふときのう橋の上で見かけた、魚籠をさげた少女の美しい眼つきを思い浮べた。その異様な声はまだ私の耳についていた。三枝がかすかに歯ぎしりをした。私はそれを聞きながら、またうとうとと眠り出した……

翌日も雨が降っていた。それは昨日より一そう霧に似ていた。それが私たちに旅行を中止することを否いや応おうなく決心させた。

雨の中をさわがしい響をたてて走ってゆく乗合馬車の中で、それから私たちの乗り込んだ三等客車の混雑のなかで、私たちは出来るだけ相手を苦しめまいと努力し合っていた。それはもはや愛の休止

符だ。そして私は何故かしら三枝にはもうこれっきり会えぬように感じていた。彼は何度も私の手を握った。私は私の手を彼の自由にさせていた。しかし私の耳は、ときどき、何処からともなく、ちぎれちぎれになって飛んでくる、例の少女の異様な声ばかり聴いていた。

別れの時はもつとも悲しかった。私は、自分の家へ帰るにはその方が便利な郊外電車に乗り換えるために、或る途中の駅で汽車から下りた。私は混雑したプラットフォームの上を歩き出しながら、何度も振りかえって汽車の中にいる彼の方を見た。彼は雨でぐっしより濡れた硝子窓に顔をくつつけて、私の方をよく見ようとしながら、かえって自分の呼吸でその硝子を白く曇らせ、そしてますます私の方を見えなくさせていた。

「#アステリズム、1-12-94」

八月になると、私は私の父と一しよに信州の或る湖畔へ旅行した。そして私はその後、三枝には会わなかった。彼は屢しばしば、その湖畔に滞在中の私に、まるでラヴ・レタアのような手紙をよこした。しかし私はだんだんそれに返事を出さなくなった。すでに少女らの異様な声が私の愛を変えていた。私は彼の最近の手紙によって彼が病気になることを知った。脊椎カリエスが再発したらしかった。が、それにも私は遂ついに手紙を出さずにしまった。

秋の新学期になった。湖畔から帰ってくると、私は再び寄宿舎に移った。しかし其処そこではすべてが変わっていた。三枝はどこかの海岸へ転地していた。魚住はもはや私を空気を見るようにしか見なかつ

た。……冬になった。或る薄氷りの張っている朝、私は校内の掲示  
板に三枝の死が報じられてあるのを見出した。私はそれを未知の人  
でもあるかのように、ぼんやりと見つめていた。

「#アステリズム、1-12-94」

それから数年が過ぎた。

その数年の間に私はときどきその寄宿舎のことを思い出した。そ  
して私は其処に、私の少年時の美しい皮膚を、丁度一灌木の枝にひ  
つかかっている蛇の透明な皮のように、惜しげもなく脱いできたよ  
うな気がしてならなかった。そしてその数年の間に、私はまあ  
何んと多くの異様な声をした少女らに出会ったことか！ が、それ  
らの少女らは一人として私を苦しめないものはなく、それに私は彼  
女らのために苦しむことを余りにも愛していたので、そのために私  
はとうとう取りかえしのつかない打撃を受けた。

私ははげしい喀血後、嘗て私の父と旅行したことのある大きな湖  
畔に近い、或る高原のサナトリウムに入れられた。医者は私を肺結  
核だと診断した。が、そんなことはどうでもいい。ただ薔薇がほろ  
りとその花弁を落すように、私もまた、私の薔薇いろの頬を永久に  
失ったまでのことだ。

私の入れられたそのサナトリウムの「白樺」という病棟には、私  
の他には一人の十五六の少年しか収容されていなかった。

その少年は脊椎カリエス患者だったが、もうすっかり回復期にあ  
って、毎日数時間ずつヴェランダに出ては、せつせと日光浴をやっ  
ていた。私が私のベッドに寝たきりで起きられないことを知ると、

その少年はときどき私の病室に見舞いにくるようになった。或る時、私はその少年の日に黒く焼けた、そして唇くちびるだけがほのかに紅あかい色をしている細面ほそおもての顔の下から、死んだ三枝の顔が透かしのように現われているのに気がついた。その時から、私はなるべくその少年の顔を見ないようにした。

或る朝、私はふとベッドから起き上って、こわごわ一人で、窓際まどぎわまで歩いて行ってみたい気になった。それほどそれは気持のいい朝だった。私はそのとき自分の病室の窓から、向うのヴェランダに、その少年が猿股さるまたもはずに素っ裸になって日光浴をしているのを見つけた。彼は少し前屈まえこじみになりながら、自分の体の或る部分をじつと見入っていた。彼は誰にも見られていないと信じているらしかった。私の心臓ははげしく打った。そしてそれをもっとよく見ようとして、近眼の私が目を細くして見ると、彼の真黒な脊せきなかにも、三枝のと同じような特有な突起のあるらしいのが、私の眼に入った。私は不意に目まいを感じながら、やっとのことでベッドまで帰り、そしてその上へ打つ伏せになった。

少年は数日後、彼が私に与えた大きな打撃については少しも気がつかずに、退院した。

底本：「燃ゆる類・聖家族」新潮文庫、新潮社

1947（昭和22）年11月30日発行

1970（昭和45）年3月30日26刷改版

1987（昭和62）年10月20日51刷

初出：「文藝春秋」

1932（昭和7）年1月号

初収単行本：「麥藁帽子」四季社

1933（昭和8）年12月5日

初出情報は、「堀辰雄全集第1巻」筑摩書房、1977（昭和52）年5月28日、解題による。

入力：kompass

校正：染川隆俊

2004年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。